

寺田寅彦

芝刈り



芝刈り

私は自分の住み家の庭としてはむしろ何も無い広い芝生しばふを愛する。われわれ階級の生活に許される程度のわずかな面積を泉水や植え込みや石燈籠いしどうろうなどでわざわざ狭くしてしまつて、逍遙しやうようの自由を束縛したり、たださえ不足がちな空の光の供給を制限しようとは思わない。樹木ももちろん好きである、美しい草花以上にあらゆる樹木を愛する。それでも数千坪の庭園を所有する事ができるならば、思い切つて広い芝生の一方には必ずさまざまな樹林を造るだらうと思う。そして生氣に乏しいわ

ゆる「庭木」と称する種類のものより、むしろ自然な山野の雑木林を選びたい。

しかしそのような過剰の許されない境遇としては、樹木のほうは割愛しても、芝生だけは作らないではいられなかった。そうして木立ちちようじの代わりに安価な八つ手や丁子ちようじのようなものを垣根かきねのすそに植え、それを遠い地平線を限る常緑樹林の代用として冬枯れの荒涼を緩和するほかはなかった。しあわせに近所じゅういったいに樹木が多いので、それが背景になって樹木の緑にはそれほど飢える事はない。

許されうる限りの日光を吸収して、芝は気持ちよく生長する。無心な子供に踏みあらされても、きびしい氷点下の寒さにさらされても、この粘り強い生命の根はしつかりと互いにからみ合って、母なる土の胸にしがみついている。そうして父なる太陽が赤道を北に越えて回帰線への旅を急ぐころになると、その帰りを予想する喜びに堪えないように浮き立って新しい緑の芽を吹き始める。

梅雨期が来ると一雨ごとに緑の毛氈もうせんが濃密になるのが、不注意なものの目にもきわ立って見える。静かな雨が音もなく芝生しばふに落ちて吸い込まれているのを見ている

と、ほんとうに天界の甘露を含んだ一滴一滴を、数限りもない若芽が、その葉脈の一つ一つを歓喜に波打たせながら、息もつかずに飲み干しているような気がする。

雨に曇りに、午前と午後と芝生の色はさまざまに変化を見せる。ある時は強烈な日光を斜めに受けて針のような葉が金色に輝いている。その上をかすめて時々何かしら小さな羽虫が銀色の光を放って流星のように飛んで行く。

それよりも美しいのは、夏の夜がふけて家内も寝静まったころ、読み疲れた書物をたたんで縁側へ出ると、机

の上につるした電燈の光は明け放された雨戸のすきまを越えて芝生一面に注がれている。まっ暗な闇やみの中に広げられた天鷲絨びろうどが不思議な緑色の螢光けいこうを放っているように見える。ある時はそれがまた底の知れぬ深い淵ふちのように思われて来る事もある。これを見ていると疲れ熱した頭の中がすうっと涼しくさわやかに柔らいで来る。私は時々庭へおりて行っているの方向からこの闇の中に浮き上がった光の織物をすかして見たりする。それからそのまん中に椅子いすを持ち出して空の星を点検したり、深い沈黙の小半時間を過ごす事もある。

芝の若芽が延びそめると同時に、この密生した葉の林の中から数限りもない小さな生き動くものの世界が産まれる。去年の夏の終わりから秋へかけて、小さなあわれな母親たちが種属保存の本能の命ずるがままに、そこらに産みつけてあつた微細な卵の内部では、われわれの夢にも知らない間に世界でいちばん不思議な奇蹟きせきが行なわれていたのである。その証拠には今試みに芝生しばふに足を入れると、そこからは小さな土色のばったや蛾がのようなものが群がって飛び出した。こおろぎや蜘蛛くもや蟻ありやその他の名も知らない昆虫こんちゆうの繁華な都が、虫の目から見たら天

を摩するような緑色の尖塔せんとうの林の下に発展していた。

この動植物の新世代の活動している舞台は、また人間の新世代に対しても無尽蔵な驚異と歓喜の材料を提供した。子供らはよくこれらの小さな虫をつかまえて白粉おしろいのあきびんへ入れたりした。なんのためにそんな事をして小さな生物を苦しめるかというような事は少しも考えてはいなかった。それでも虫の食物か何かのつもりで、むしり取った芝の葉をびんの中へ詰め込んで、それで虫は充分満足しているものと思っっているらしかった。そのまま忘れて打っちやっっておいたびんの底にひっくり返って

死んでいるからだを見つけた時はやはりいくらかかわいそうだとは思うらしい。それで垣根かきねのすみや木の下へ「虫のお墓」を築いて花を供えたりして、そういう場合におとなの味わう機微な感情の胚子はいしに類したものを味わっているらしく見える。子供が虫をつかまえたり、いじめたり殺したりするのは、やはりいわゆる種属的記憶と称するものの一つでもあるだろうか。このような記憶あるいは本能が人間種族からすっかり消え去らない限り、強者と弱者の関係はあらゆる学説などとは無関係に存続するだろう。

子供らはまたよくかやつり草を芝の中から捜し出した。三角な茎をさいて方形の^{わくがた}枠形を作るといふむつかしい幾何学の問題を無意識に解いて、そしてわれわれの空間の微妙な形式美を味わっている事には気がつかないでいた。相撲^{すもう}取草^{とりぐさ}を見つけて相撲を取らせては不可解な偶然の支配に対する怪訝^{けげん}の種を小さな胸に植えつけていた。

芝の中からたんぽぽやほおずきやその他いろいろの雑草もはえて来た。私はなんだかそれを引き抜いてしまうのが惜しいような気がするのでそのままにしておく、

いつのまにか母や下女がむしり取るのであった。

夏が進むにつれて芝はますます延びて行った。芝生しばふの単調を破るためにところどころに植えてある小さなつっじやどうだんやばらなどの根もとに近い所は人に踏まれないためにことに長く延びて、それがなんとなくほうけ立ってうるさく見えだした。母などは病人の頭髪のように気持ちが悪いと言ったりした。植木屋へはがきを出して刈らせようと言っているうちに事に紛れて数日過ぎた。

そのうちに私はふと近くの町の鍛冶屋かじやの店につるして

あつた芝刈り鋏ばさみを思い出した。例年とちがつてことしは暇である。そして病気にさわらぬ程度にからだを使つて、過度な読書に疲れた脳に休息を与えたいと思つていたところであつたので、ちようど適当な仕事が見つかつたと思つた。芝の上にすわり込んで静かに両腕を動かすだけならば私の腹部の病気にはなんのさしつかえもなさそうに思われた。もつとも一概に腕や手を使うだけなら腹にはこたえないという簡単な考えが間違いだという事はすでに経験して知っていた。たとえばタイプライターをたたいたり、ピアノをひいたりするような動作でもど

うかするとひどく胃にこたえる事がしばしばあった。ことに文句に絶えず頭を使いながらせき込んで印字機の鍵けん盤ばんをあさる時、ひき慣れないむつかしい楽曲をものにした。ようとして努力する時、そういう時には病的に過敏になった。しかしこれは手や指を使うというよりもむしろ頭を使うためらしく思われた、芝を刈るというような、機械的な、虚心でできる動作ならばおそらくそんな事はあるまいと思われた。少なくとも一日に半時間か一時間ずつ少しも急いだり努力したりしないで、気楽にやっていたら

さしつかえはあるまい。こんな事を考えながら私は試みに両腕を動かして鋏はさみを使うまねを試してみた。まだ実際には経験しない芝刈りの作業を強く頭に印象させながら腕を動かしてみたが、腹に力を入れるような感覚は少しも生じて来ないらしかった。念のために今度は印字機に向かったつもりになって両手の指を動かしているといつのままにか横隔膜の下のほうが次第に堅く凝って来るのを感じた。

このような仮想的の試験があてになるかどうかは自分にも曖昧あいまいであったが、ともかくも一つ実物について試験

をしてみても、もしさわりがありそうであつたら、すぐにやめればよいと思つた。

風のない蒸し暑いある日の夕方私はいちばん末の女の子をつれて^{はさみ}鋏を買いに出かけた。燈火の乏しい樹木の多い狭い町ばかりのこのへんの宵闇は暗かつた。^{よいやみ}めつたに父と二人で出る事のない子供は何かしら改まつた心持ちにでもなつているのか、不思議に黙つていた。私も黙つていた。ある家の前まで来ると不意に「山本さん^{やまもと}の……セツ子さんのおうちはここよ」と言つて教えた。たぶん幼稚園の友だちの家だろうと思われた。「セツ子さ

んは毎朝おとうさんが連れて来るのよ。」……「おとうさんはいつになつたらお役所へ出るの。……出るようになったら幼稚園までいっしょに行きましようね。」こんな事をぽつりぽつり話した。表通りへ出るとさすがに明るかった。床屋のガラス戸からもれる青白い水のような光や、水菓子屋の店先に並べられた緑や紅や黄の色彩は暗やみから出て来た目にまぶしいほどであった。しかしその隣の鍛冶屋かじやの店には薄暗い電燈が一つついているきりで恐ろしく陰気に見えた。店にはすぐに数えつくさるくらいくわの品物——鍬くわや鎌かま、鋏はさみや庖丁ほうちょうなどが板の間の

上に並べてあつた。私の求める鋏はさみはただ二つ、長いのと短いのと鴨居かもいからつるしてあつた。

ちようど夕飯をすまして膳ぜんの前で楊枝ようじと団扇うちわとを使つていた鍛冶屋かじやの主人は、袖無そでなしの襦袢じゆばんのまま出て来た。そして鴨居かもいから二つ鋏はさみを取りおろして積もつた塵ちりを口で吹き落としながら両ひじを動かしてぐあいをためして見せた。

柄の短いわりに刃の長く幅広なのが芝刈り専用のもう一つのはおもに木の枝などを切るのだが芝も刈れない事はない。芝生しばふの面積が広ければ前者でなくては追

付かないが、少しばかりならあとのでもいい。素人しろうとの家
庭用ならかえってこれがいいかもしれないなどと説明し
ながら、そこらに散らばっている新聞紙を切って見せた
りした。「こういう物はやっぱり呼吸ですから……。」
そんな事を言った、また幾枚も切り散らして、その切り
くずで刃の塵ちりをふいたりした。

芝を刈る鋏と言えば一通りしかないものと簡単に思い
込んでいた私は少し当惑した。このような原始的な器械
にそんな分化があるうとは予期していなかった。どちら
にしようかと思っただけかかわるがわる二つの鋏を取り上げて

ぐあいを見ながら考えていた。なるほど芝を刈るにはどうしても専用のものがぐあいがいいという事は自分にも明白に了解された。しかしそれで枯れ枝などを切ると刃が欠けるといふ主人の言葉はほんとうらしかった。

私はなんだか試験をされているような気がした。主人は団扇うちわと楊枝ようじとを使いながら往来をながめていた。子供は退屈そうに時々私の顔を見上げていた。

とうとう柄の長いほうが自分の今の運動の目的には適しているというある力学的な理由を見つけた、と思ったのでそのほうを取る事にした。

鋏を柄に固定する目くぎをまださしてないから少し待
 ってくれというので、それができるまでそこらを散歩す
 る事にした。しばらく歩いて帰って来ると目くぎは
 もうささかれていて、支点の軸に油をさしているところ
 あった。店先へ中年の夫婦らしい男女の客が来て、出刃でば
 庖丁ほうちょうをあれかこれかと物色ばさみしていた。……私がどうい
 うわけで芝刈り鋏ばさみを買っているかがこの夫婦にわから
 ないと同様に、この夫婦がどういう径路けいじろからどういう目
 的てきで出刃でば庖丁ほうちょうを買っているのか私には少しもわからな
 かった。その庖丁の未来の運命も無論だれにもわからう

はずはなかった。それでも髪を櫛卷くしまきに結った顔色の妙に黄色いその女と、目つきの険しい男とをこの出刃庖丁と並べて見た時はなんだか不安なような感じがした。これに反して私の鋏がなんだか平和な穏やかなもののように思われた。

長い鋏をぶら下げて再び暗い屋敷町へはいった。今まで黙っていた子供は急に饒舌じょうぜつになった。いつ芝を刈り始めるのか、刈る時には手伝わしてくれとか、今夜はもう刈らないかとか、そんな事をのべつにしやべっていた。父が自分で芝を刈るといふ事がよほど珍しいおもしろい

事でももあるように。

しかし私自身にとっても、それはやはり珍しく新しい事には相違なかった。

宅^{うち}へ帰ると家内じゅうのものがいずれも多少の好奇心と、漠然^{ぼくぜん}としたあすの期待をいだきながらかわるがわるこの新しい道具を点検した。

翌日は晴天で朝から強い日が照りつけた。あまり暑くならないうちと思つて鋏を持って庭へ出た。

どこから刈り始めるかという問題がすぐに起こつて来た。それはなんでもない事であつたがまた非常にむつか

しい問題でもあった。いろいろの違った立場から見た答
解はいろいろに違っていた。できるだけ短時間に、でき
るだけ少しの力学的仕事を費やして、与えられた面積を
刈り終わるといふ数学的の問題もあった。刈りかけた中
途で客間から見た時になるべく見にくくないようにとい
う審美的の要求もあった。いちばん延び過ぎた所から始
めるといふ植物の発育を本位に置いた考案もあった。こ
んな事にまで現代ふうの見方を持って来るとすれば、と
もかくも科学的に能率をよくするために前にあげた第一
の要求を満たす方法を選んだほうがよさそうに思われ

た。能率を論ずる場合には人間を器械と同様に見るのであるが、今の場合にはそれでは少し困るのであった。もともと自分の健康という事が主になっている以上、私はこの際最も利己的な動機に従って行くほかはないと思つたので、結局日陰の涼しい所から刈り始めるといふきわめて平凡なやり方に帰ってしまった。

するとまたすぐに第二の問題に逢着ほうちやくした。芝生しばふとそれより二寸ぐらい低い地面との境界線の所は芝のはえ方も乱雑になっているし、葉の間に土くれなどが交じっているために刈りにくくめんどうである。その上に刈り取

った葉がかぶさったりするとなおさら厄介やつかいであった。それでまずこの境界線のはえぎわを整理した後、平たい面積に掛かるほうが利口らしく思われた。しかしこのはえぎわの整理はきわめてめんどうで不愉快であって、見たところの効果の少ない割りの悪い仕事であった。

おしまいにはそんな事を考えている自分がばからしくなってきたので、いいかげんに、無責任に、だらしなく刈り始めた。

青白い刃が垂直に平行して密生した芝の針葉の影に動くたびにザツクザツクと気持ちのいい音と手ごたえがし

た。葉は根もとを切られてもやはり隣どうしもたれ合つて密生したままに直立している。その底をくぐって進んで行く^{はさみ}鋏の律動につれてムクムクと動いていた。鋏^{はさみ}をあげて^{かえ}翻すと切られた葉のかたまりはバラバラに砕けて横に飛び散った。刈ったあとには^{ちやかっしよく}茶褐色にやけた朽ち葉と根との網の上に、まっ白にもえた茎が、針を植えたように現われた。そして強い土の香がふんと鼻にしみるように立ちのぼった。

無数の葉の一つ一つがきわめて迅速に相次いで切断されるために生ずる特殊な音はいろいろの事を思い出させ

た。理髪師の鋏はさみが濃密な髪の一束一束を切って行く音にいつも一種の快感を味わっていた私は、今自分で理髪師の立場からまた少しちがった感覚を味わっているような気がした。それから子供の時分に見世物で見た象が、藁わらの一束を鼻で巻いて自分の前足のひざへたたきつけた後に、手ぎわよく束の端を口に入れて藁のはかまをかみ切った、あの痛快な音を思い出したりした。しかしなぜこの種類の音が愉快であるかという理由はどう考えてもわからなかった。音の性質から考えればこれは雑音の不規則な集合で、音楽的の価値などは無論無いものである。

しかしあるいはこれは聴感に対する音楽に対立させうべき触感あるいは筋肉感に関する楽音のようなものではないか。音自身よりはむしろ音から連想する触感に一種の快を経験するのではあるまいか。それともまたもつと純粹に心理的な理由によるものだろうか。あるいはひよつとしたらわれわれの祖先の類人猿時代るいじんえんのある感覚の記憶でないとも言われな**い**と思つたりした。

鋏の進んで行く先から無数の小さなばつたやこおろぎが飛び出した。平和——であるかどうか、それはわからぬが、ともかくも人間の目から見では単調らしい虫の世

界へ、思いがけもない恐ろしい暴力の悪魔が侵入して、非常な目にも止まらぬ速度で、空をおおう森をなぎ立てるのである。はげしい恐慌に襲われた彼らは自分の身長
の何倍、あるいは何十倍の高さを飛び上がってすぐ前面
の茂みに隠れる。そうして再び鋏はさみがそこに迫って来る
まではそこで落ち付いているらしい。彼らの恐慌は単に
反射的の動作に過ぎないか、あるいは非常に短い記憶し
か持っていないのだろうか。……魚の視感を研究した人
の話によると海中で威嚇された魚はわずかに数尺逃げの
びると、もうすっかり安心して悠々ゆうゆうと泳いでいるという

事である。……今度の大战で荒らされた地方の森に巢をくっていた鴉からすは、砲撃がやんで数日たたないうちにもう帰って来て、枝も何も弾丸の雨に吹き飛ばされて坊主になった木の空洞くうどうで、平然と子を育てていたと伝えられている。もっともそう言えば戦乱地の住民自身も同様であつたかもしれない。またある島の火山の爆裂火口の中へ村落を作っていたのがある日突然の爆発に空中へ吹き飛ばされ猫ねこの子一つ残らなかつた事があつた。そうして数年の後にはその同じ火口の中へいつのまにかまた人間の集落が形造られていた。こんな事を考えてみると虫の

短い記憶——虫にとっては長いかもしれない記憶を笑う事はできなかつた。

無数に群がっている虫の中には私の^{はさみ}鋏のため^{はさみ}に負傷したり死んだりするの**も**ずいぶんありそうに思われて、多少むごたらしい気がしないでもなかつた。しかしどうする事もできないのでかまわず刈って行つた。これらの虫は害虫だか益虫だか私にはわからなかつた。

子供の時分に私の隣家に信心深い老人がいた。彼は手足に蚊がとまって吸おうとするのを見つけると、静かにそれを追いのけるとい**う**事が金棒引きの口から伝えられ

ていた。そしてそれが一つの笑い話の種になっていた。私も人並みに笑ってはいたが、その老人の不思議な行為から一つのなぞのようなものを授けられた。そうして今日になってもそのなぞは解く事ができないでそのままになっっている。のみならずこのなぞは長い間にいろいろの枝葉を生じてますます大きくなるばかりである。

たとえば人間が始まって以来今日までかつて断えた事のないあらゆる闘争の歴史に関するいろいろの学者の解説は、一つも私のふに落ちないように思われた。……私には牛肉を食っていながら生体解剖ヴァイヴァイセクションに反対している人

たちの心持ちがわからなかった。……人間の平等を論じる人たちがその平等を猿さるや蝙蝠こうもり以下におしひろめない理由がはつきりわからなかった。……普通選挙を主張している友人に、なぜ家畜にも同じ権利を認めないかと聞いて怒りを買った事もあった。

今はさみ鋏はさみのさきから飛び出す昆虫こんちゆうの群れをながめていた瞬間に、突然ある一つの考えが脳裏にひらめいた。それは別段に珍しい考えでもなかったが、その時にはそれが唯一の真理であるように思われた。——もう昆虫の生命などは方則の前の「物質」に過ぎなくなった。私と私の

鋏はその方則であり征服者であり同時に神様であつた。私はわれわれ人間の頭上に恐ろしい大きな鋏を振り回している神様の残忍に痛快な心持ちを想像しながら勢いよく鋏の取っ手を動かして行つた。

病気にさわる事を恐れて初めの日は三尺平方ぐらゐにしてやめた。昼過ぎに行つて見ると、刈られた葉はすっかりかわき上がつて、青白い干し草になつて散らばつていた。日向ひなたにさらされたままの鋏の刃はさわつて見ると暑いほどにほてつていた。

学校から帰って来た子供らは、少なからざる好奇心をもつて刈られた部分を点検したあとで、我れ勝ちに争つて鋏を手にした。しばらくして見に行つて見ると、芝生の上にはねずみがかじつたように、二三角形や、片かなや、ローマ字などが表われていた。九歳になる女の子は裁縫用の鋏で丁寧に一尺四方ぐらいの部分で刈りひらいて、人差し指の根もとに大きなかわいい肉刺まめをこしらえていた。

いろいろの時刻にいろいろの人が思い思いの場所を刈っていた。人々の個性はこんな些細ささいな事にも強く刻みつ

けられていた。大まかに不ぞろいに刈り散らして虎斑とらふを
 こしらえる者もあれば、一方から丁寧に秩序正しく、蚕
 が桑の葉を食って行くように着々進行して行くものもあ
 った。ある者は根もとまでつめて刈り込まないと承知し
 ないし、またある者はある長さの緑を残すように骨を折
 っているらしく見えた。

書齋で聞いていると時々鋏はさみの音が聞こえたが、その
 音のぐあいではだれがやっているかはたいていわかった。
 午前に私が刈り初めようとするとよく来客があった。
 そういう事が三四回もつづいた。来客を呼ぶおまじない

だと言つて笑うものもあつた。これは無論直接の因果関係ではなかつたが、しかし全くの偶然でもなかつた。二つの事がらを制約する共通な条件はあつた。ただその条件が必至のものでないだけの事であつた。

毎日少しずつ鋏を使いながら少しずついろいろの事を考えた。いろいろの考えはどこから出て来るかわからなかつた。前の考えとあとの考えとの関係もわからなかつた。昔ミダス王の理髪師がささやいた秘密を蘆あしの葉が再びささやいたように、今この芝の葉の一つ一つが、昔だれかに聞いた事を今私にささやいているのかもしれな

い。

たとえば私は自分で芝を刈る事によって、植木屋の賃銀を奪っているのではないかという問題に出会った。そしていろいろもて扱っているうちに、これがもうかなり古いありふれた問題である事に気がついた。それかと言ってこれに対する明快な解決はやはり得られなかった。

延び過ぎた芝の根もとが腐れかかっているのを見た時に、私はふと単純な言葉の上の連想から、あまりに栄え茂りすぎた物質的文化のために人間生活の根本が腐れか

かるのではないかと思つてみた。そしてそれを救うにはなんとかして少しこの文明を刈り込む必要がありはしないかと考えた。しかし芝と文化とはなんの関係もない。芝を刈るのがいいといつても文明を刈り取るがいいという証拠にも何もならない事は明らかであつた。あまりに皮相的な軽率な類推の危険な事を今さらのように思つてみたりした。実際そんな単純な考えが熱狂的な少数の人の口から群集の間に燎原りょうげんの火のようにひろがつて、「芝」を根もとまで焼き払おうとした例が西洋の歴史などにないでもなかつた。文明の葉は刈るわけにも焼くわ

けにも行かない。

始めのうちはおもしろがっていた子供らもじきに飽きてしまつてだれも鋏はさみを手にするものはなくなつた。ただ長女と私とが時々少しずつ刈つて行つた。そのうちには雨が降つたりして休む日もあるので、いちばん始めに刈つた所はもうかなりに新しい芽を延ばして来た。

最後に刈り残された庭の片すみのカンナの葉陰に、一きわ濃く茂つた部分を刈つていた長女は、そこで妙なものを発見したと言つて持つて来た。子供の指先ぐらいの

大きさをした何かの卵であった。つまんで見ると殻は柔かららかくてぶよぶよしていた。一つ鋏にかかってつぶれたのをあけて見たら中には蜥蜴とかげのかえりかかったのがはいっていたそうである。「人間のおなかの中にいるときとよく似ているわ」とそばから小さな女の子が付け加えた。私は非常に驚いてこの子供の知識の出所を聞きただしてみると、それがお茶ちやの水みずで開かれたある展覧会で見たアルコールづけの標本から得たものである事がわかった。子供らはこの卵の三つか四つを日当たりのいい縁側の下の土に埋めておいた。数日たった後に掘ってみたらも

う何もなかつたそうである。ここにも大きな奇蹟きせきはあつた。

十日ほどにわたつた芝刈りがやつと終わった。結果はあまり体裁のいいほうではなかつた。刈り手の個性と刈り時の遅速とが芝生の上に不規則なまだらを描かいていた。休まず働はたらいている自然の手がその痕跡こんせきをぬぐい消すにはまだ幾日か待たなければならなかつた。

保養の目的が達せられたかどうかはわからなかつた。たいしてからだにさわりもしなかつた代わりに別段のいい効果があつたとも思われぬ。そのような効果が、秤はかり

や升ますではかれるように判然とわかるものだったら、医師
はさぞ喜びもしまた困る事だろうと思った。——ただ
蜥蜴とかげの卵というものを始めて実見したのがおそらくこの
数日の仕事の一番の獲物であつたらうと思つてゐる。

（大正十年一月、中央公論）

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館